

第4章 総括

リニア中央新幹線長野県駅周辺整備の一環として行われた今次調査では、幅広い時代の遺構・遺物を検出し、当遺跡の性格が明らかとなった。そのなかで、古墳時代の遺物が多数出土した SX031 は大きな成果であり、その性格について考察する。最後に全体の調査成果を総合し、調査のまとめとしたい。

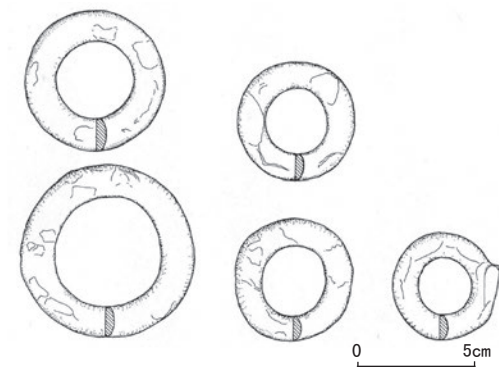
第1節 大型遺構 SX031 について

遺構の性格 当遺構は3区で確認された遺構である。調査が及んだのは遺構全体の南側の一部と考えられる。古墳時代の遺物が多数出土した。

第2章で触れたとおり、昭和30年（1955）刊行の『下伊那史』第2巻に「塚田」について記載があり、調査区付近に石室墳が埋没した可能性が指摘されている。SX031 は全体的に円弧状の外形を呈する大型の掘り込み遺構で、埋土から古墳時代の遺物が多数検出されている。したがって、SX031 は古墳の周溝であり、『下伊那史』の記録に残る「塚田」、すなわち飯沼塚田古墳の一部と考えられる。ただし、調査範囲内で墳丘の立ち上がりは認められなかったため、墳形を特定するには至らなかった。

遺構西側を中心に検出された巨礫群に規則的な並びはなく、礫の上下や間から馬具や鉄鏃、須恵器等が出土した。これらはすべて無加工の川原石であり、葺石あるいは石室用材の可能性が考えられるが、当地域の後期古墳で一般的な葺石よりも大型のものが多く、どちらかといえば、墳裾に配置される基底石の大きさに近いが、古墳の破壊が行われ、基底石のみが周溝内の一地点に集められているのはやや不自然である。断言はできないが、SX031 の巨礫群は飯沼塚田古墳の石室に使用されていた岩石である蓋然性が高い。いずれにせよ、原位置をとどめるものはなく、古墳時代遺物と同レベルから直上の層にかけて平安時代の遺物が出土することから、当該期に何らかの要因で破壊され、SX031（周溝）に石室用材の巨礫と副葬品とが混在した状態で埋没したと考えられる。

出土遺物の特徴と年代 馬具、鉄鏃、須恵器等は飯沼塚田古墳に副葬されていた遺物とみられる。馬具は鞍（18）があり、鞍を構成していたことがわかる。輪金は刺金がない単純な形態である。また、金銅装の鉢状雲珠（20）は稜の退化と小型化が進行しており、心葉形の杏葉もしくは鏡板とみられる金銅張の破片（21）には、大型化した鉾がつく。これらの特徴から、馬具類は宮代栄一の編年におけるⅦ期、内山敏行の終末期1段階に位置づく（宮代 1996、内山 1996）。したがって、当古墳には7世紀前半に相当する年代の馬具が少なくとも1組は埋納されていたと考えられる。このほか、環状鉄製品（24）は

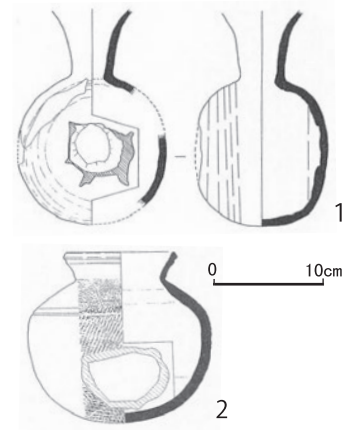


第38図 下石橋愛宕塚古墳出土環状鉄地金銅張製品

扁平な鉄の素環である。有機質は残存せず、他の部品との連結方法等は復元しえない。平面形態的には、轡をともしない簡素な馬装に用いられる「無口頭絡」とされる辻金具と類似し、群馬県高崎市観音塚古墳などで報告されている（宮代 2016）。一方、栃木県下石橋愛宕塚古墳では、大きさの異なる鉄地金銅張の環状製品一式の出土例がある（第38図）。これらはいずれも馬具の一種として認識されているものの、使用方法の特定には至っていない。また、本例はそれらに比べ薄く扁平であり、強度にはやや不安がある。以上により、環状鉄製品の評価については、馬具の可能性のある一部品として示し、今後の研究に託したい。

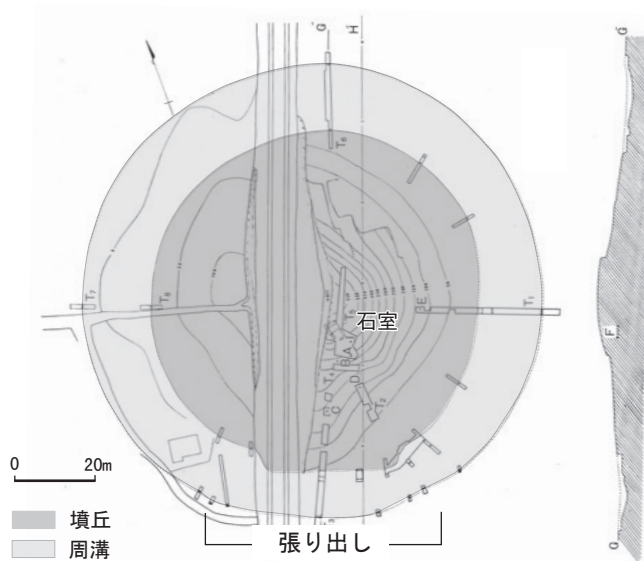
鉄鍬は平林大樹のⅡ期、Ⅲ期の鍬がそれぞれ含まれる。年代は信濃の鉄鍬編年において、7世紀第1～第2四半期に比定でき（平林 2013、中村 2015）、概ね馬具と並行する時期の所産である。鍬の時期区分に基づけば、複数回の埋葬行為も想定しうるものの、後期・終末期鍬は一括性の担保が難しく、個々の型式に想定される年代に幅があり、この段階における追葬の存否は不明である。

須恵器は概ね7世紀初頭前後に位置づけられる。ただし、台付長頸瓶（28）は7世紀後葉～末頃の所産で、他の須恵器と明確に時期差を認めることができる。甕は3個体が確認できた。いずれも内面に当て具痕が一切残らず、32は胴部に微細な凹線が巡る。これらは当該期における愛知県猿投窯産の製品の特徴である（角脇 2006・藤野 2013 ほか）。フラスコ形瓶（29）も頸部の長さや二重の横線、口縁端部下の段が小さいといった特徴から猿投産と考えられる⁽¹⁾。一方で平瓶（26）は白色度の高い胎土からなり、頂部にボタン様の部品が付くもので、猿投・湖西窯以外で生産された製品とみられる。この個体の体部への穿孔は、打ち欠いた際の破片まで残り、儀礼痕としても興味深い。飯田市域の古墳における須恵器の体部への穿孔例は、川路地区の久保田1号古墳周溝内出土の短頸壺（第39図-1）や燄魔王塚古墳出土のフラスコ形瓶（第39図-2）がある。まだ類例は少ないが、地域内で



1:燄魔王塚古墳 2:久保田1号古墳

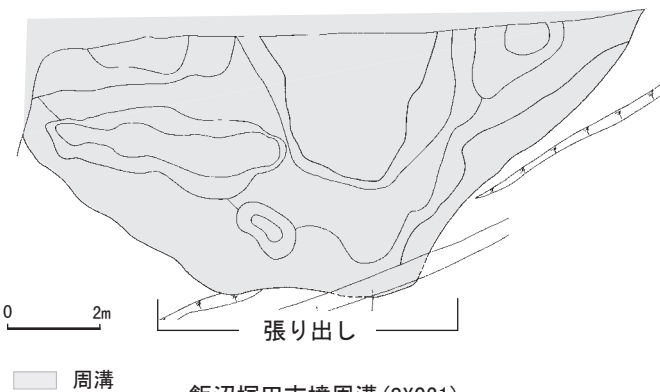
第39図 穿孔のある須恵器



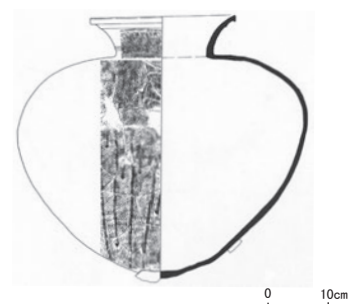
下石橋愛宕塚古墳墳丘・周溝



石室前庭部出土須恵器甕



飯沼塚田古墳周溝 (SX031)



周溝内出土須恵器甕

第40図 下石橋愛宕塚古墳と飯沼塚田古墳

第4章 総括

須恵器の穿孔を伴う儀礼が共通して行われていたようである。

以上の各遺物の年代観から、当古墳の築造・初葬は7世紀初頭を中心とする時期であり、その後も少なくとも7世紀末頃までは利用されていたと考えられる。

張り出しと土器供献 SX031は古墳の周溝であり、大半は未調査であるが、調査結果から円形に近い形状に復元しうる。ただし、南側は円弧を描かず台形状に張り出す点で、通有の円墳にみられる周溝と異なる。当地域の後期古墳でこのような平面形の周溝は調査事例がない。広域的にみれば、北関東における1例として、栃木県下石橋愛宕塚古墳がある（第40図）。報告によると、当古墳は墳丘長84mを測る三段築成の大型円墳で、墳丘の南側で約5m方形に突出する箇所があり、それに対応して周溝もわずかに南側へ張り出す。飯沼塚田古墳については墳丘の張り出しの有無は調査が及ばず確認できなかったものの、周溝の南側が張り出すという点で下石橋愛宕塚古墳に類する可能性がある。

張り出しの性格を考えるうえで、須恵器甕（31）とその出土位置が目を引く。周溝内で破碎された後に自然埋没しており、原位置を保つ遺物である。この甕が張り出し付近の周溝内から出土したことを重視すれば、張り出しが祭祀を行う場としての性格を有していたことも想定しうる。なお、下石橋愛宕塚古墳では須恵器甕が石室の前庭部付近や墳丘各所に供献されている。

以上のような例があるものの、当古墳周溝の張り出しが関東の影響によるものかを断言することはできない。一方で、出土した須恵器に猿投系が含まれることから、東海地方との交流も看取される。山間部である飯田盆地への器物の運搬には、産地はもとより運搬に使用された経路や手段の想定が不可欠である。高橋透は6～7世紀の東海産須恵器の流通について考察するなかで、シナノにおける尾張産須恵器の出土量のピークが7世紀第2四半期～後半にあることを指摘し、天竜川などの河川を利用した搬入を想定した（高橋 2015）。これに加え、令制東山道の前身にあたる内陸交通路（いわゆる古東山道）も物資の流通に関わっていたことは十分に考えられる。当古墳の須恵器類も、7世紀のはじめに活発化し始めた尾張地方との交流によって、いずれかの内陸交通ルートを通じてもたらされたとみられる。

以上のような広域的な影響関係については飯田の古墳を考えるうえで欠かせない視点だが、実態はまだ十分に解明されているとはいえない。いずれにせよ、東西各地域との関係がそれぞれ推察でき、古来より東西交通の結節点である飯田という地域の特質を端的に表す成果といえる。

周辺の集落・古墳との関係 土曾川を挟んだ西浦遺跡の対岸の座光寺地区には3基からなるナギジリ古墳群、石原田古墳などの小規模な古墳が分布し、古墳時代後期の主要な墓域としてとらえうる。土曾川からやや離れる石塚1号・2号古墳は大型の無袖式横穴式石室をもち、座光寺地区を一望する高所に立地する、古墳時代後期中葉～後葉にかけての座光寺の首長墓とみられる。対して、それより下層の集団は土曾川流域の谷間を墓域として志向したようである。これらのうち、ナギジリ1号古墳が飯沼塚田古墳と同時期の墳墓であろう。当古墳は石室の調査により得られた遺物の年代幅から、6世紀末の築造以後8世紀代までの利用が考えられる。土曾川左岸に分布する他の古墳についても各記録から、後期から終末期を中心とする可能性が高い。これに対して、飯沼塚田古墳は谷間を出て開けた右岸段丘上にあり、母体となった集落は土曾川右岸（上郷地区北部）の集落であると考えるのが自然である。その候補となるのは、西浦遺跡から1段下の低位段丘に展開するママ下遺跡・堂垣外遺跡が挙げられる。共に古墳時代後期後半の集落で、ママ下遺跡周辺は地名等から古代牧を想定する見解もある（宮澤 2002）。

今次調査では飯沼塚田古墳の本来の墳形や規模までは確認できなかったが、金銅装馬具や鞍の存在などからみて、有力な人物（あるいは集団）が存在し、関東や東海と交流をもっていた可能性がある。後期後半まで土曾川右岸には有力な古墳の系譜は認められないことから、飯沼塚田古墳は当該期における新興勢力の台頭を示す遺構かもしれない。詳しくは今後の検討に委ねることとしたいが、地域内の動向や他地域との関係を解明するうえで、当古墳は重要な位置を占めることとなるだろう。

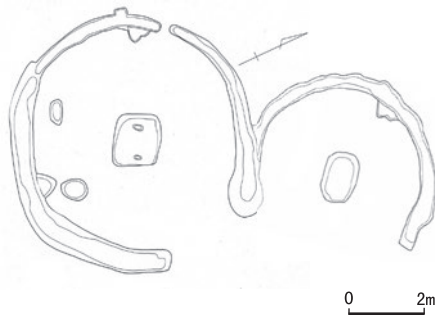
第2節 西浦遺跡の特徴と変遷

今次調査では、西浦遺跡が広がる段丘面の東端から中央付近までを調査した。地形的には、背後の段丘崖から天竜川の方へ突き出す、平坦化した尾根上にあるともいえる。これまでに縄文時代の遺構が存在することは知られていたが、今次調査によって、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が検出され、長きにわたり人の営みが行われてきたことが判明した。以下、時代別に成果をまとめ、土地利用の変遷を確認したい。

縄文時代 遺構はほとんど把握できなかったが、遺構検出面の精査中や縄文時代以降の遺構の掘削中に石器、土器等の遺物が若干ながら出土した。過去の旧上郷町教委による現・市道 193 号線の調査により、縄文時代の集落が把握されていることから、当該期の集落の中心は調査地北西側の段丘崖直下に位置し、今次調査区はその縁辺部にあたると考えられる。

弥生時代 集落に関しては、竪穴建物 1 棟を把握したにとどまる。年代は弥生時代後期後半の中島式の最終段階に位置づく。調査された建物は、段丘面の内側に立地する。居住域は段丘面の中央寄りに広がると想定できる。遺物としては、竪穴建物 SI001 から出土した有孔磨製石包丁が目立つ。2 孔が穿たれる石包丁は、北信地域を中心に分布し、1 孔が多数を占める当地方では稀少である。一方、平面形態は長方形に近く、石材に珪質片岩を用いる点は、当地域で一般的である。

周溝墓 弥生時代の墓域は周溝墓の分布から、段丘の内側にまで及ぶことが判明した。今次調査では、方形周溝墓 4、円形周溝墓 2 が把握された。特筆すべきは円形周溝墓である。北信の千曲川流域で卓越する墓制で、当地域では飯田市上郷地区のミカド遺跡、伊賀良地区の殿原遺跡、喬木村の埴牛原遺跡および伊久間原遺跡、高森町の広庭遺跡で少数が確認されているにすぎない（小山 1999、山下 2001）。表 6 に挙げたとおり、当遺跡で新たに確認された 2 基は、飯田・下伊那で調査された円形周溝墓の中ではやや小型と思われるが、ミカド遺跡例のように周溝の一部を共有する（第 41 図）。しかし、依然として地域内では少数を占めるにとどまり、北信との交流の中で一部の集落にのみ導入された外的墓制としてとらえる。



第 41 図 ミカド遺跡の円形周溝墓

対して、方形周溝墓は当地域で盛行する墓制である。出土遺物がきわめて少なく、時期ごとの変遷はとらえることができなかったが、段丘端部と内側の双方で確認されたため、墓域の移動も考えられる。

古墳時代 後期後半に飯沼塚田古墳が築造された。古墳時代後期頃の竪穴建物として SI003 があり、西浦遺跡にも集落が存在していたようだが、造営主体としては段丘下にママ下遺跡や堂垣外遺跡など、候補となる有力な集落がある。

遺跡名	市町村	地区	遺構名	規模(m)	主体部（規模/形態）	時期	備考
西浦	飯田市	上郷	SZ089	?×(4.8)	?×1.0m 楕円形土坑(SK092)	弥生後期?	094と周溝を一部共有
			SZ094	?×(4.2)	—	弥生後期?	089と周溝を一部共有
ミカド	飯田市	上郷	円形周溝墓1	6.8×6.5	1.4×1.2m 箱形木棺か	弥生後期?	2と周溝を一部共有
			円形周溝墓2	5.2×4.2	1.3×0.9m 隅丸長方形土坑	弥生後期?	1と周溝を一部共有
殿原	飯田市	伊賀良	円形周溝墓1	3.9×3.6	1.6×1.0m 隅丸長方形土坑	弥生後期後半	弥生土器（中島式）出土
広庭	高森町	—	円形周溝墓	7.5×6.5	1.3×0.6m 不整長方形土坑	弥生後期?	
伊久間原	喬木村	—	円形周溝墓Ⅰ	7.2×6.4	2.0×1.5m 隅丸長方形土坑	弥生後期後半	弥生土器（中島式）出土
			円形周溝墓Ⅱ	?×6.5	—	弥生後期後半	弥生土器（中島式）出土
埴牛原	喬木村	—	Ⅱ号(6号)円形周溝墓	7.1×6.8	2.0×1.0m 隅丸長方形土坑	弥生後期?	弥生土器出土

表6 飯田・下伊那における円形周溝墓一覧

第4章 総括

豊富な副葬品からみて土曾川右岸の主要な後期古墳であり、中核的な墓のひとつとして評価できる。他に、天伯山1号・2号古墳も西浦遺跡と連続する尾根上にある。築造時期の特定はできないが、飯沼塚田古墳に先行する中期古墳の可能性があり、当地の墳墓の連続性を考えるうえで重要である。築造後、飯沼塚田古墳は7世紀末頃まで利用されたと考えられる。

平安時代 竪穴建物としてはSI002の1棟を把握したにとどまるが、SX031の埋土上層から灰釉陶器、緑釉陶器等の破片が多く出土した。平安時代にも当遺跡には集落が形成されており、陶器類は集落で使用されたものが古墳の周溝内に投棄されたとみられる。SX031では古墳時代の遺物に混じって平安時代の遺物が出土しており、飯沼塚田古墳付近は平安時代後期に大きく改変を受けている。古墳に破壊が及んだ理由は定かではないが、平安時代末期までに成立していたという寄進地系荘園の郡戸庄に関わる開発行為も考えられる。

中世 遺構としては溝SD006を切り合いと埋土の特徴から当該期としたが、掘立柱建物や周辺のピット群には中世と考えられるものが多く見受けられる。排土中や遺構検出中に陶器片が一定数出土したほか、青磁碗(49)の出土もあり、有力者の居住が推定される。

西浦遺跡における今次調査の大きな成果は、縄文時代から中世に至るまでの複合遺跡としての性格を新たに把握できたことにある。さらに、『下伊那史』で存在が指摘されていた古墳の再発見も予想に反する結果であった。段丘端部に形成された平坦面に立地する当地は、眼下に広がる生産域との地理的關係も良好で、長きにわたり人々が好んで生活の場所を選んできたことが改めて証明された。今後もリニア中央新幹線および長野県駅周辺整備に伴う発掘調査によって、周辺の遺跡の様相が一層明らかになり、集落間や墓域との関係も鮮明になると思われる。今後の歴史的評価の進展に期待する。

註

(1) 鈴木敏則氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

- 伊藤 尚志 2005「第Ⅱ章 古代の土器」『恒川遺跡群 遺物編その1 古代・中世』飯田市教育委員会
- 城ヶ谷 和広・井上 喜久男 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』愛知県
- 内山 敏行 1996「古墳時代の轡・杏葉の編年」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 尾野 善裕 2000「猿投窯(系)須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』、東海土器研究会
- 角脇 由香梨 2006「古墳時代の須恵器生産 一東山古窯址群の特質をめぐって一」『きりん』第9号、荒木集成館友の会
- 小山 岳夫 1999「弥生時代の円形周溝墓—弥生時代後期に長野県千曲川流域を中心に流行した円形周溝墓出現の意味—」『信濃』第51巻第10号
- 高橋 透 2015「6～7世紀のシナノにおける東海産須恵器の流通」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅴ —大室谷支群ムジナゴロ単位支群の調査—考察篇』明治大学文学部考古学研究室
- 寺内 隆夫 1998「弥生時代の土地利用」『更埴条理遺跡 屋代遺跡群 —弥生・古墳時代編—』(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 —更埴市内その4—)、(財)長野県埋蔵文

- 化財センター
- 中村 新之介 2015「古墳時代北信における鉄鏃 ―大室古墳群を中心に―」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅴ―大室谷支群ムジナゴロー単位支群の調査―』考察編、明治大学文学部考古学研究室
- 平林 大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬鏃の変遷」『物質文化』93 物質文化研究会
- 藤野 一之 2013「猿投産須恵器からみた古墳時代の地域間交流」『駒澤考古』38 駒澤大学考古学研究室
- 宮澤 恒之 2002「伊那郡衙周辺の馬牧情報 ―上郷堂垣外遺跡を含む地名の検討―」『伊那』9月号、伊那史学会
- 宮代 栄一 1996「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 宮代 栄一 2016「群馬県高崎市観音塚古墳出土馬具の再検討 ―8組の馬装の復元とその性格―」『埼玉考古』51 埼玉考古学会
- 山下 誠一 1999「飯田・下伊那の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』99 シンポジウム発表要旨 長野県考古学会弥生部会
- 山下 誠一 2001「飯田盆地における周溝墓の動向 ―弥生時代から古墳時代における墓制の様相―」『飯田市美術博物館研究紀要』11
- 山下 誠一 2004「飯田盆地における古墳時代後期集落の動向 ―発掘された竪穴住居址を基にして―」『飯田市美術博物館紀要』第14号

報告書

- 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998 『ナギジリ 1号古墳』
- 飯田市教育委員会 1994 『堂垣外・橋爪・藪上・長橋遺跡』
- 飯田市教育委員会 2002 『久保田遺跡・久保田 1号古墳・燄魔王塚古墳』
- 飯田市教育委員会 2003 『ママ下遺跡』
- 喬木村教育委員会 1978 『伊久間原』
- 喬木村教育委員会 1982 『埴牛原遺跡群』
- 高森町教育委員会 1981 『瑠璃寺前・大島山東部・広庭遺跡』
- 上郷町教育委員会 1989 『ツルサン遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』小規模排水対策特別事業下黒田中部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 太宰府市教育委員会 1983 『大宰府条坊跡Ⅱ』大宰府市の文化財第7集
- 栃木県教育委員会 1973 『下石橋愛宕塚古墳』

挿図出典

- 第38・40図 栃木県教育委員会 1973より引用、一部加筆
- 第39図 飯田市教育委員会 2002より引用
- 第41図 上郷町教育委員会 1989より引用、平面図2図を合成